【10】平和博〈昭和10年代前半〉…戦争なかりせば

1 東洋一

太平洋戦争の始まる前の名古屋は、まさに絶頂期といえる時代でした。人口は、100万人を越えたと思ったら、瞬く間に10万、20万と増えていきました。そして政策の合言葉も、世界というところを少し遠慮した「東洋一」だったようです。

当時、名古屋で東洋一が語られたものには、①中川運河、②東山動物園、③名古屋駅舎などがあります（図１）。そして昭和12年に開くことにした汎太平洋平和博覧会も、心は世界だったのです。しかし国が15年に万国博を開く計画だから、失礼だから「汎太平洋」にしたと、大岩市長は語っています。

図１　昭和12年。出来たころの新・名古屋駅
（絵はがきから）

今回は、このように、一気に世界を意識して市政を推進していった、昭和10年代前半の名古屋を追ってみたいと思います。

2 大岩市長の仕事

(1)総合的な交通体系

名古屋は、明治、大正と幹線道路の整備に力を入れてきました。明治20年の広小路通に始まり、まず、東部・西部・南部（熱田街道＝大津通）等の幹線道路を整備しました。大正の都市計画では大街路網を計画したうえで、五大道路と名付けた幹線街路を先行整備し、次の２期事業を進めていました。そしてそれらの道路には路面電車が敷設され、都市を広げていたのです（図２）。一方周辺部の道路も区画整理によって計画街路が次々に整備され、ここも幹線道路には路面電車が延びていました。

一方名古屋でも、大正初めに乗り合いのバスが運行を始めています。昭和に入ると車両も立派になり、都市交通機関として路面電車と競争するほどに成長しました。バスは比

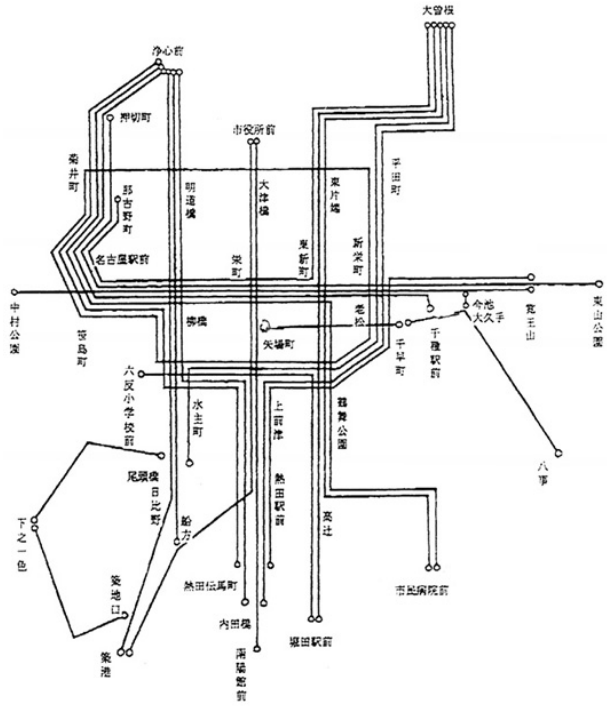

図２　博覧会時点の市電の路線・系統。
「日比野―築港」が博覧会ルート

較的小規模な企業でもスタートできるため、次々に新しいバス会社が登場したのです。昭和５年には、政争で止まっていた３年越しの市営バスの許可が県から下り、市もバス事業を始めました。

ところが各バス会社間の競争はだんだん激しくなり、さらに路面電車とも競合するようになりました。そのためサービスは偏り、各社の経営基盤を脅かすことになったのです。市では様々な議論をしましたが、結局、総合的な交通体系をつくりあげるために、私営バス等を買収することになりました。市は10年から市内の私営のバスと電車の買収を始め、13年には全社を買収して市営化を図ったのです。そして路面電車とバスとで、市の中心部と郊外部それぞれに調和のとれた交通体系をつくることができるようになりました。大都市としての基幹的な大事業を成し遂げたといえます。

(2)二つの「東洋一」

東洋一という言葉が用いられるようになったのは、昭和５年の中川運河の竣工の時からでしょうか。パナマ運河のような閘門式の運河で、両側に工場用地をセットした計画的な運河は、国内にも例がなかったのでしょう。

つづいて昭和10年代の初め、２つの施設が東洋一の評判で登場しました。１つは、移設工事が進んでいた名古屋駅舎です。笹島にあった旧名古屋駅が手狭になったため、市は国鉄に新しい駅舎の整備を要請していました。大正13年の都市計画では、その駅前道路として新たに広幅員の桜通を設定しています。新駅は北約200㍍の所の旧線の背後に計画されました。ビルは、274㍍と長く、５・６階建てで、東京駅の３階建てを追い抜いたためか、東洋一と呼ばれたようです。完成は昭和12年。駅舎正面には44㍍幅の桜通も開通して、名古屋の顔を一新することになりました。

いま１つが、新設された東山動物園です。市の東部に大規模な土地が寄付され、かねてから拡大要請のあった鶴舞公園の動物園がその中に移設されることになったのです。当時の北王園長は、ドイツのハーゲンベック動物園を見習って柵のない放養方式の動物園を考えました。そしてできた新動物園は、規模もさることながら、屋外にライオンがいるような、これまでの動物園の概念を覆すものになったのです。まさに質、量ともに東洋一にふさわしい動物園ができ上がりました。

このほかにも、同じ頃できた植物園でも、近年重要文化財になったガラスの温室が、「東洋一の水晶宮」と呼ばれています。

(3)汎太平洋平和博

昭和９年、東洋一の新名古屋駅が出来始めた時、市会から完成を記念した博覧会開催の意見書が出されました。12年には、新駅が完成し、港が開港30周年、そして空港も完成する年でした。陸・海・空の新しい玄関ができることになるのです。

大岩市長は、待っていましたとばかりにそれを受け、県と経済界の協力を取り付け、「汎太平洋平和博覧会（以降、平和博と略）」の開催を決めました。「汎太平洋」という言葉は国が万国博を計画中なので遠慮したといいますが、一方では我が国初の国際博を狙っていました。また「平和」は、軍拡の時代に思い切った決定でした。これに対しては、大岩市長は、博覧会の総裁に皇族の陸軍中将・東久邇宮の就任を仰ぎ、軍の圧力に対応しています。会場は、中川運河の沿線、街と港をつなぐ未開発の名古屋港の後背地が選ばれました。

昭和12年３月、平和博は現在の港区港明町の50㌶の会場で開会しました（図３）。そして78日間の会期中に、480万人を集めるという大成功を収めました。外国を正式に招待した博覧会としても、29ヶ国の参加で、その半数は政府参加です。

軍部は、陸軍の協力はありませんでしたが、期間中に航空隊の祝賀飛行があり、海軍は協力的で、戦艦「伊勢」を名古屋港に航行させています。

残念だったのは、終了後１か月余で日中戦争が勃発し、せっかくの平和博が吹っ飛んでしまったことです。そして無残にも、時代は戦争一色に変わっていきました。

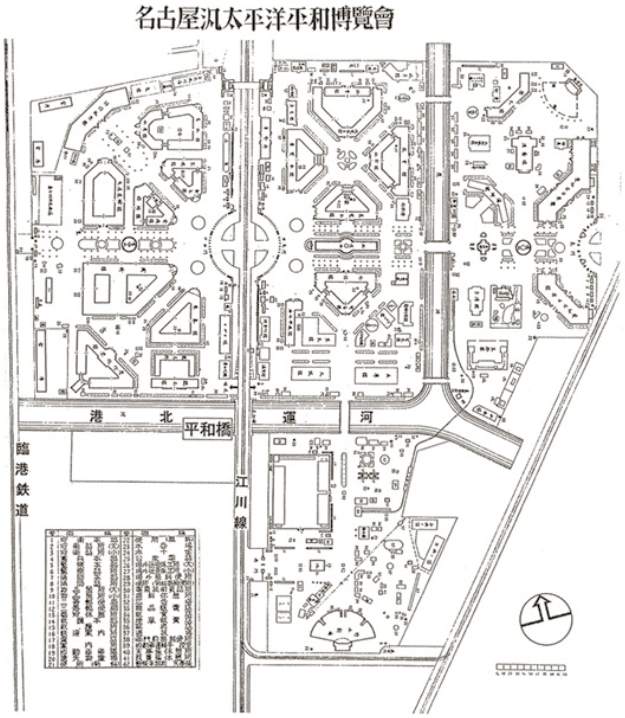

図３　汎太平洋平和博覧会の会場図。
中央の「〇に十字」に見える所が東西の正門

3 紀行 中川運河と平和博

… 港と街の中間に …

今回は、当時、東洋一を語られた中川運河を歩き、昭和12年、我が国初の国際博となった汎太平洋平和博の会場跡を訪ねてみます。

〈中川橋から〉

地下鉄の築地口駅を降りて、エレベーター

運河河口の中川橋。
現在、橋台建設中で移設されている

で地上に出ます。西に幹線道路を進み、少し上って貨物線を渡ると、赤い橋が見えます。この橋は中川運河河口の中川橋で、今は改修中のため道路は迂回しています。

橋を渡って右に出ると、川べりは遊歩道になっています。この辺りは船溜まりです。少し行くと、中川口閘門があります。この区間で、海面と運河水面の差を調整するのです。

中川口閘門。
この区間でパナマ運河のような水位調整が行われる

中川運河は、昭和初期、水運が物流を支えた時代に、名古屋の浮沈をかけたプロジェクトでした。都市計画地方委員会にいた石川栄耀は、ハンブルグなど西欧の都市が世界的になったのは河川沿いの工業地帯だと、その必要性を説きました。そのうえこの運河は鉄道駅と港湾を結ぶ幹線ルートでもあったのです。運河沿いに進みます。幅はこの辺りは90㍍でしょうか。河沿いに公園が続きます。現在の中川運河はその役目を終えており、周囲の

いろは橋から上流の景観。
右遠方に名古屋駅前の高層ビル群も見える

広大な東邦ガス工場の跡地では、次の開発が始まっていた

土地利用は工場から運輸業に変わりました。

次の橋を渡って、今度は左岸を歩きます。これから先の右側は東邦ガスの工場でしたが、今はゴルフ練習場等に再開発されています。少し行くと運河の支線、港北運河を渡ります。ここはまだ水面が残っています。渡った先も広い再開発地域です。用地の北側で運河と別れ、右に用地に沿って曲がって進みます。

支線の港北運河。今は「キャナル」と呼ばれている

〈港区役所へ〉

東に進むと鉄道線路に突き当たります。名古屋港への貨物線の跡ですが、平和博では名古屋駅からの重要な輸送手段になりました。

会場の西側にあった貨物線。
博覧会では名古屋駅からの輸送に活躍した

線路は渡れないので、左に大回りをして線路の東側に出ます。そして再開発用地に沿って進みます。ここから博覧会会場です。

小さな緑地を過ぎ、高速道路のある幹線道路に出て右に曲がります。この道路は、博覧会のためにつくられた会場の中央を通る道路です。高速道路が左にカーブするあたりの東西には会場の正門がありました。今は西門跡が再開発工事の出入口になっています。博覧会では、その門から東を向くと、会場の奥に、シンボルの平和塔が建っていました。

南に進むと車道が坂を上っています。その歩道を上ると、上に橋の跡が残されています。これが、博覧会の唯一の遺跡、平和橋です。橋柱を見ると、「平和橋」と残ります。西側を見ると、広い再開発用地では工事が始まっています。干拓地、博覧会、工場、そして今度はどんな施設になるのでしょうか。

南に坂を下り、右側の側道をバックすると先ほどの橋の下が潜れるようになっています。

博覧会で今日まで唯一残った史跡。
「平和橋」名もはっきりと

最近つくられた港北公園の中の平和博の案内板

潜った先は港北公園ですが、その入口に、最近博覧会跡の記念案内板が建てられました。ここで平和博のあったことを示す、貴重な案内板です。南に少し行くと、地下鉄の港区役所駅があります。

4 東久邇宮

軍拡の時代の昭和初期、名古屋はなぜ、あえて「平和」をテーマにした博覧会を開催したのでしょうか。その本当の心は分かりませんが、カギとなるのは、「東久邇宮稔彦王」の総裁就任です。

宮は、昭和20年、戦後最初の総理大臣になって、軍を解体した方です。その宮が、５年から１年半程、陸軍歩兵第５旅団長として名古屋に赴任しておられました。７年の国産自動車アツタ号の試乗や白壁町や覚王山にお住まいだったという記録も残ります。

10年頃、大岩市長は宮に総裁就任を依頼しました。その時、市長からか、宮からかはわかりませんが、「平和」の話がなされたはずです。当時、「平和」という言葉は、軍にとって禁句だったでしょう。年々数十㌫も軍備費をアップしていた時代です。そんな時に、軍の幹部が「平和博」のトップに就任するということは、余程のことだと考えられるのです。事実陸軍は、皇族の陸軍中将が総裁だった博覧会には公には反対できませんでした。

あえて軍の圧力に抗してまで、交流こそが繁栄の基だと主張し、「平和」をテーマにした祭典を開催したこと。そして市民も経済界も、それを必死に推進したこと。そのことを、名古屋は忘れないようにしたいものです。

〈主な参考文献〉

①同編集委員会『新修名古屋市史⑥』(2000、名古屋市)
②名古屋市『汎太平洋平和博覧会誌 上巻』
(1938、同博覧会)
③亀田忠男『大岩勇夫と大名古屋』
(2001、㈱地域問題研究所)